暮沢剛巳（東京工科大学デザイン学部・教授）

「大阪万博における祝祭と廃墟――丹下健三と磯崎新」

発表要旨：今年は 1970 年に大阪万博が開催されてから 55 年目の節目の年に当たる。この万博は、1964 年の東京オリンピックと並ぶ戦後復興の象徴として位置づけられると同時に、今年開催の 2025 年大阪・関西万博ともしばしば対比されてきた。本発表は、未曽有の国家事業であったこの万博の中でも、会場計画の中枢を担った丹下健三と磯崎新の関与へと焦点を合わせる。

1965 年、5 年後に開幕を控える大阪万博のテーマが「人類の進歩と調和」に決定した。この決定は桑原武夫を座長とするテーマ委員会によるものだったが、実は丹下もそのメンバーとして、主に都市計画の観点から積極的に提言していた。その後丹下は京大の西山夘三（「お祭り広場」の命名者）とともに会場計画の前後半を担当することになるのだが、丹下は次第に主導権を掌握し、千里丘陵を舞台とする会場の基幹デザインを主導することになった。その丹下から、メイン会場である「お祭り広場」の総合演出を託されたのが、丹下研究室出身の若手建築家であった磯崎新である。

様々な試行錯誤を繰り返した丹下は、会場の最寄駅に直結するメインゲートから北に延びる「お祭り広場」を全体の縦軸に見立てた会場計画を構想した。その最も重要な基幹施設が、広場全体を覆う長さ 292 メートル、横幅 108 メートルの巨大な大屋根である。この大屋根は無数の住宅ユニットが空中で連結されたヨナ・フリードマンの「空中都市」やパリのポンピドゥー文化センターのモデルとも言われるセドリック・プライスの「ファン・パレス」の影響が指摘されるが、あくまで計画案にとどまったこの両者に対して、「お祭り広場」を実現させた丹下はいたって現実的な手腕の持ち主であった。

一方磯崎は、「お祭り広場」と大屋根のコンセプトを「Invisible Monument」と命名し、世界の伝統的な催事のほか、現代アート的な趣向や「万能ロボット」による制御を提案している。結局この提言は実現しなかったが、情報化する未来とその中心をなす電脳的環境の提案は、その後磯崎の様々な作品を通じて実現されていくことになる。それはまた、大屋根を突き破って起立する岡本太郎の「太陽の塔」とも好対照をなしていた。

以上はほんの一例だが、もともとは師弟関係に当たる丹下と磯崎が志向する建築・デザインはかなり異質なものであった。ここでは両者の志向をそれぞれ「祝祭」と「廃墟」と仮称し、いくつかの実例を交えてその違いを明らかにしていく。

発表者は今までに『大阪万博が演出した未来』（共著）『オリンピックと万博』『万国博覧会と「日本」』など、万博をテーマとする数冊の著書を出版している。発表者の万博観はそれらの著作で述べられている通りだが、研究のプロセスで考え方に変化が生じた部分もある。本発表のテーマは、過去の著作で論じた内容を再構成しつつ、主にデザインという観点から、そこに新たな知見を交えたものである。